

---

# クリスマスイヴの丘の上

Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスイヴの丘の上

### 【Zコード】

N7027P

### 【作者名】

Y

### 【あらすじ】

クリスマスにはびこる町中のカップル。

モテない僕達がそんなやつらに対してのささやかな抵抗を行う戦記。

「さあ、今年はデスクリスマスだ！」

まさかの展開にきっと驚くクリスマスイヴシリーズ第2弾！

君は知つてゐるだらうか？

幸せになれるのは世界中の全員ではないということを。

皆は知つてゐるだらうか？

イケメンリア厨達に全てを奪われた”僕達”のことを。

これは僕達がクリスマスという敵、カツプル達という障害、サンタクロースという僕達に不幸せという苦水を飲ませる存在と戦う戦記である。

クリスマスイブの丘の上……僕達は永久の友情を誓った。

さあ、皆に見せてやう。僕達の醜い底力を。

メリークリスマス 今年は”デスクリスマス”だ！！

「周防、こっちの準備はできたよ」

「ああ、今行くよ」

今僕達は町外れの丘の上　そこに建てた小屋の中に入る。

……あ、説明が遅れたか。

僕は周防天和。モテないボーイズ&ガールズ、そしてこれを見ている君と同じ存在だ。

少し向こうで普段は見慣れない機械をいじっているのはリム・F・リリーベル。名前の通り外国人だ。

僕達がなにをしようとしているのか、それは”クリスマスを破壊する”準備だ。

具体的になにをするのかは追々説明したいと思つ。

「ねえ周防、椎名やガンホーはまだ来ないの？」

「まだ集合時間より10分早いからね。もう少しでくるんじゃないかな」

「ようやくこの日が来たんだね……奴等に復讐をするときが…」

モデルガンのライフルの装弾を済ますリム。

危険だからこんなところでそんなもの振り回さないで欲しい。

「ちーっす。お、早速やつてるねえ」

「ふむ、俺達が最後だったようだな」

小屋の扉を開けて入ってきたのは俺達の仲間、椎名柚貴しいなゆきと蒲生北郷がもうほくきょうことガンホーだ。

「遅いです二人共」

「なーんだよ、まだ集合時間には早いだり」

悪態をつくりムに対してもつともな正論を言つ椎名。まあ別に柚のヤツは悪くないと思つからフォローしてやるかな。

「ひりりム、そんな怒ることないだろ。遅れたわけじゃないんだか  
「あら」

「わ、わかってるよ……ただ早く準備は済ませとくこ越したことはないでしょ」

「ふむふむ、確かに正論だね。というわけで柚、ガンホー。早く仕事仕事」

「わーつったよ。つってもまあ俺の作業はもう終わるとこなんだけだな」

「ならこいつの作業を手伝ってくれんか……まだ少し時間がかかりそうだ」「うだ

「えー？ ガンホー、おめえ身体でけえんだから一人でやってくれよ

「俺の身体がでかいのは関係ないだろ？……それに作業とは脳で協力するものだ」

「せうこつ」とだ袖。そつちが終わつたらガンホーを手伝つてやう。僕も手伝つから」

「さすがリーダーだな、椎名も少し見習え」

「うつせえデカブツ。周防ばっかし棚に上げてんじやねえや」「ひら柚、喋つてばかりいないで作業に集中しないか。リムはもう終わったといつていたよ」

「別にいいだる、まだ時間はあるんだし」

「クリスマスが今年もやーつてくれるー」

「やああああめええええろおおおおおおーーーーそんなデスソングを聞かせるんじやねえーーーー」

「もへ、ならちやんと作業してください椎名」

「ふきかけやがつて……おこリムー！ めえいい加減に！」

「ジングルベージングルベー、鈴があー鳴るーーー」

「ザヤあああああああーーー悪魔の鈴があああああーーー」

まつたく……仲が良いのか悪いのかよくわからない連中だ。そうだ、ここで教えておこう。

我等の部隊の名は”DC”（デスクリスマスの略）。

僕達はリア厨達が楽しくしていふのを羨ましく思いそれを破壊して

やううという集団だ。

そして僕はその部隊の全7部隊の中で第4部隊のリーダーをやつている。

メンバーには当然クリスマスを呪う理由がある。

リムは工業高校の出身なので場の空気的にろくに恋愛をすることができなかつた。

工業高校は女子にくらべて圧倒的に男子の数が多いので男子もなかなか声を掛けづらいのだろう。

リムはまあ僕から見たら可愛いと思う。

え？ ジヤあお前がデートにでも誘えつて？

いやまあ……そういうわけにもいかないんだよ。察してくれよ。

柚……椎名柚貴はその軽そうな態度から女子から“よく遊んでそういう人”にみられているらしい。  
見た目とかからもそういう雰囲気は伺えるけど本人曰く恋愛経験も異性との関係を持ったこともないといつ。

ガンホー……蒲生北郷は学校生活はずっとラグビー部の活動に汗を流していたそうだ。

その大きな身体も相まって少し怖がっていたのか、恋愛事などにはまったく関与したことがないとか。

僕は……僕の理由は少し複雑だ。

まあそのうちわかると思つから今は言わないでおくよ。

さて、大方の準備は終わつたようだ。

今日は12月24日、クリスマスイヴ……僕達の作戦決行日時だ。  
僕達の任務、それはこの町に大きな炎になるように配置されたクリスマスツリーを模したイルミネーションを25個全て破壊すること。

そしてその円の中心にあり、25日0時になった瞬間にライトアップするという巨大クリスマスツリーも破壊すること。

え？立派なテロ行為じゃないかって？

確かにそうかもしない。というかそれ以外の何者でもないと思う。それでも僕等は抗うしかないんだ。それもこんな形でしか抗えないなんて哀れだと思わないか？

もし思うのだったら僕達に似合う良い異性を紹介して欲しい。ま、「冗談はさておきそろそろミッションスタートの時間だ。僕達の任務は一人一つ、合計4つリムお手製の爆弾を使ってツリーを破壊すること。

「さあみんな、そろそろ行こうか」

「周防、椎名が戦闘不能だよ」

「来るなっ……お前の服が基本赤なのは返り血なんだろ！？なあ、殺人鬼S・クロース！？」

「おい柚、柚っ……駄目だ。完全に死んでる」

「どうするの？」

「…………する」

僕は息をゆっくり吐くと1、2の、3で歌いだす。

「真っ赤なお鼻の一、トナカイさんは一、いつもみんなの一、わらいものー」

「嫌だああああああああ！！！笑いものになりたくねええええ！！！」

「！」

「あ、起きた」

「『テスソング』で復活するとはよくわからんな」

「ガンホー、君も体感してみる？」

「……断つておぐ」

「さうか」

「まあおひやりともいこまでだ。  
そろそろミッションに行かなくては。」

「ああーコア厨のやつらに任せてもいいが、  
たまおおひやりともいこまでだ。」

「柚……君は本当に哀れだね……。いや、良い意味も悪い意味も含  
めて」

「えーっと……うん、爆発の威力にも問題なこと諦つ……こけるよ  
うなふけるよ」

「では行くかー」

「よー……各自、散開ー！」

「うして僕達のミッションが始まった。」

皆小屋を出であらかじめ指定しておいたポイントへ爆弾を仕掛けこ  
まっしへり走つていった。

僕は小屋の中へ一人残される……。せ。

「お前もいたつけな、イヴ」

物陰からじりと現れたのは白い猫。

ここで活動する内にいつしか顔を合わせるようになったのだ。  
僕が初めてみたイヴの日の雪のようなインパクトの強い美しい白い毛並みを持っていたのでイヴと名づけた。

クリスマス関係に敵対しているはずの僕だったがそのイヴとこう口前がとても似合っていると僕は思っている。

「お前も来るかい？」

「やあ、と一聲なくトイヴは僕の肩へぴょんと乗り込む。

「軽いなお前……ちやんとい飯食べているのかい？」

「やあ、トイヴは返事をしたが僕には当然なんと言つてこらの理解できない。

まあ元気そうだししゃんと食べているのだらう。

「じゃあ行こうかイヴ。クリスマスパーティーに連れて行ってやるよ

「やあ」とまたトイヴは一聲鳴いて僕の言葉に返事をした。

「なんか賑やかだね、やっぱつ

カップルなどで賑わう町の中、僕とイヴは歩いていた。

綺麗なイルミネーションがピカピカ光り、いつも見る風景とは違つ  
町はまるで別世界のように思えた。

でも、僕達にとってはその光りは絶望でしかない。  
決して僕達はリア厨にはなれないのだ。

「イヴ、お前もやうなのかい？」

にやあ、とただイヴは鳴くだけ。

「やうかい」

猫と話をする」とは叶わないが言いたい」とはなんとなくわかる。  
イヴは今この状況を楽しんでいるようだ。

「お前は気楽でいいな」

にやあ、と鳴いたイヴが「やうかい」と言つてころよつに聞こ  
えた。

しばらく歩いてくる内に目標ポイントの一つ クリスマスツリー  
にたどり着いた。

「イヴ、ちょっと降りてな」

イヴを肩から降ろすと僕は小型の爆弾をポケットから取り出しシリ  
ーへと歩く。

まったく恥々しいな……。いろんなものは僕達を不幸せにするだけだと  
いつの」。

そつと爆弾を木の根の影に設置するとなに食わぬ顔でイヴのところ  
へ戻る。

「ただいまイヴ」

「やあ、と鳴いたイヴは多分「おかえり」とか言ってくれたに違いない。

「じゃあそれそろ小屋に戻るつか。イヴ、お前も寒いだろ？」

イブは鳴かない。

「なんだい、もう少し歩いていたいのかい？」

「やあ、トイブは鳴いた。

「お金はないから何も買つてやれないけど……いいよ、デートの続きだ」

なんとなく、だけれど僕にはトイブが嬉しそうに鳴いた気がした。  
そんなわけで僕達は小屋へは戻らずにしばらくこの綺麗で汚い町を歩くことにした。

「まつたく……猫は炬燵で丸くなるんじゃなかつたのかい？」

「やあ、と鳴くやの仕草には「他の猫と一緒にするな」と言つてこようつに見えた。

「はははっ、猫にも厨二病があるとは知らなかつた」

外から見ていたら僕は相当の変態に見えたことだろう。  
でも僕は楽しいからいいんだ。

僕が楽しいからやつとやつも楽し。そんなものだと細つて、僕は。

「ただいま」

「周防、遅い！ 一体どれだけ時間かけているの…？」

「…………」めぐ

結局小屋に帰ってきたのはあれから一時間後。  
目標時間の〇時までもう〇〇分をあつてこむといひだつた。

「…………まさか周防、例のやつらにまたなにか……」

「違うよソム、僕がなんのために”僕”と名乗つてゐるか忘れたの  
？」

「そりや…………忘れてはいなにナビ

「だつたらいいんだ。…………そっちの首尾は？』

「上手くいつたわ。後は待つだけね」

「やうかい

僕は小屋の床へ腰を下ろす。

暖房が効いてるので寒いところとはなかつたがやはり座り心地

がいかんせんよくない。

イヴもいつの間にかどこかへ行ってしまったようだ。

「なにか飲む?」

仮設したキッチンへ向かっていたリムが僕へ声をかけた。  
外から帰ってきたのだ、いくら暖房が効いてるとはいえ少し暖かい  
ものが飲みたい。

「じゃあ、ココア頼める」

「お安い御用よ」

ふう、目標時間までは後は待つだけ……か。  
なんだかあつという間のことだったな。

「隣、いいか?」

「ん?ああ、いいよ」

そういうてドスン、と僕の隣に座ってきたのは大きな身体のガンホ  
ーだった。

「もうすぐ俺達の務めが終わるな

「そうだね」

「……あつといふ間だつたな

「僕も今そう思つてたところ」

「せつか

「……ねえ、ガンホー」

「なんだ?」

「僕はね、今まで短い間だけ君達といて楽しかったよ

「……俺もだ」

「でもやつぱりまだ怖いんだ……君と、柚が」

「仕方あるまい。……辛いことだつたんだろ?」

「……嫌な記憶がこゝにこつまでもつきまとつかうや、せめて楽しこ記憶もすつとつをまとめてくれたらなつて想うんだ」

「……それは俺達のことか?」

「うふ、監と過ごしたこの数日はとても充実していた。リアルがね。

」

「リア厨……とはまた違うのか」

「どうだらうね

自分達が敵対していたものに今自分達がなつている……おかしな話だ。

「でも君達のおかげで多少僕の……アレがマシになつたのは確かだ  
」

「さうか、それはよかつた

ガンホーはずっと窓のまづを見ている。

今後のクリスマスツリーの惨状が気になるのだらうか。

「では、俺は先に外に出でこる。また後でな」

「うそ、また後で」

手をふり見送るとドアのヒンジでずれ違ひように今度は柚が現れた。

「……隣」

「いいよ

言いたいことはわかつていたので先に言つてやつた。

「なんだよ、調子狂うな」

「なんの調子だよ、なんの

相変わらずといつべきか、柚はよくわからぬいやつだ。

「なあ周防

「……なんだい？」

「まだ駄目なのか……例のアレは

「……少し、ね」

「これはさ、それを視野に入れての話なんだけども……」

私のアレを視野に入れたことでの話……まさか。

「俺と付き合ひつてのはやっぱなしなのか？」

……やっぱりか。

告白されるのは実は初めてではないのだが……。

「……」めんね、ちょっとまだ整理がつかないよ

「…………椎名」

そこへ現れたのが「コアを持つトリム」だった。

ナイスタイミングなのかナイスでないのかよくわからない。

「あのね、告白するなどは言わないですよ。でもせめて周防が”僕  
”から”私”に戻るまで待てませんか？」

「…………すまねえ」

「リム、別に僕は

「周防」

「…………はい」

「……なんでもないよ」

時計を見るともつまもなく日没にさしかかる。0時に近い。

「二人共、そろそろ行こう。ライトアップが始まる」

「ええ」

「わかった」

外へ出ると第4部隊だけでなく全部隊の人たちが丘に集まっていた。

「よう周防、今日の勤めご苦労だつたな！」

「ええ、ボスこそ今までお疲れ様でした」

「まあまあ、そいつを言つのは全部が終わつてからだぜ」

僕が話していたのは全部隊を束ねる存在 ボスと呼ばれる人物だ

った。

もともとこれだけの人数が集まつたのはネットでボスがモテない人たちが集まるサークルを作つたおかげでもある。

「もうすぐ……ですね」

「ああ…… よしお前らー カウンターダウンこぐわおーーー」

「おおー!!!!!!」

「一〇・九・八・」

そして爆発へのカウントダウンが始まる。

どうしたことになるのかは実際に0時を迎えるのはいけないので僕は心なしか、わくわくしていた。

7!6!5!

これが終われば僕達のつながりもこれでお終い。  
そこからは、なにもない。

「4！3！2！...」

さあ、僕達がこの数日で成し遂げられることはどれだけ大きいことなのか。

あいつらに見せてやるうじやないか。

0時に町中央にある大きなクリスマスツリーがライトアップされる予定なので周囲の市民やカップル達はそれを目当てに観客がたくさんいるはずだ。

「そうやって注目が集まっているところを……ふふ、想像しただけで

101

「イイイイヤツツホオオオオオ————！メリ——クリ

スマ-----ス!-----」

ドカ-----ン!-----

カウントダウンの〇とともにライトアップされるはずのクリスマスツリーは見事に爆発した。

綺麗なライトアップじゃないか。

「 まあ皆、サツが来るまで飲み明かそうぜえーー！」

さて、今から警察がここへ来るまでしばし宴の時間だ。

皆して「リア厨でもあーー」とか言つて居る。まったくその通りだ。そうやってしばらくドンチヤン騒ぎをして居るとパトカーの音が聞こえてくる。

「 .....もう来たのか .....。おめえらーサツが来たが決して逃げるんじゃない!そいつはリア厨へ負けたことをみとめるつてことだぜーー!」

ボスは毎回めちゃくちゃなことを言つがなぜか説得力がある。  
まあそんなことはもとよりサークルのルールだつたが。

次々とつかまる仲間達.....もちろん私だつて例外じゃない。  
手錠に繋がれパトカーへと連れて行かる。

こんな時考えることは「ああ、手錠つて冷たいな」とかそんなくだらないことだつた。

パトカーに乗り込むと窓からなにか動いているものが雪の中にみえ

る。

あれは……。

「……イヴ？」

そうか、もうあいつには会えないのかな。

そう考えると少し目頭が熱くなる。

あいつは僕……いや、私の始めてのデート相手だったな。そういうえ  
ば。

「さよならイヴ。多分初恋だったよ

パトカーが動き出す。

最後にイヴがにゅあ、と鳴いたのがどうかはわからなかつた。

(後書き)

クリスマスイヴの丘の上、どうでしたでしょうか?  
短編にもまさかの展開というものはどうしてもつけたくて主人公を  
あんな感じにしてみました。

まだこれから見るという人は是非読んでみて、そして「まさか!」  
と思っていただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7027p/>

クリスマスイヴの丘の上

2010年12月31日01時03分発行